SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

「想いを伝える書き文字」：南部生涯学習センターとの共催講座 「和の心 筆で書く年賀状」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2012-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉﨑, 哲子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006862

〈実践報告〉

「想いを伝える書き文字」

ー南部生涯学習センターとの共催講座「和の心　筆で書く年賀状」ー

杉 﨑　哲 子*

"The written characters by which we express our true feelings"
～"A taste of Japanese, A brush written new year's greetings"
by the joint lecture with Southern Lifelong Learning Center ～

要旨

地域に開かれた大学として、静岡大学教育学部の芸術文化課程書文化講座では、以前から静岡市の文化事業との共催で様々な活動を展開してきており、非常勤講師であった筆者も企画運営に携わって学生に対して講座での支援内容を指示してきた。しかし今回の講座は完全なる授業の一環と位置付け、学生の主体性を重要視して企画運営の段階から関わらせることができた。本報告はこの実践の成果を記すとともに、学生を絡めた地域連携としての「書道」について考察していく。

キーワード：　書道　生涯学習　文化講座　手書き文字　年賀状　メッセージ

1.　はじめに

地域との連携には、学内での実践に地域の方を招く場合やこちらから既に設定された会場へと出前講義に出向く、公共施設を借りて大学側がイベントを仕掛けるなどの様々な形態が考えられる。いずれの場合でも、地域事業担当者との間で綿密な相談を繰り返しながら作り上げていく責任が生じる。さらに、そこに学生を関わらせるとなると、その際の立ち位置の明確化が重要になる。

今回の講座では、学生の主体性を重要視して企画運営段階から関わらせた。学生には授業内容との関連性を理解させて臨んだが、これまでに経験のない「企画」に困惑し、ある程度学生側で話し合って提示した内容が地域事業担当者の意識と合致するものではないなど、手探り状態のスタートであった。しかし相違点を明確にして協調できる部分を掘り下げて進める過程を通し、また実践結果の検証によって、学習者である受講者の方の志向や講座開催の意義が一層明確になってきた。今後に向けての課題も明確にしながら、学生を絡めた地域連携としての「書道」について考察する。

＊静岡大学教育学部 書文化講座・国語講座

2．講座実施の背景

2.1.　静岡市視聴覚センター（マビック）との協同事業関連研究について

平成 18 年度から平成 22 年度まで 5 カ年に渡って継続的に実施された静岡市との協同事業「早春書作公募大会」に関わり、静岡大学教育学部の書文化講座では、「主体性をもって書き表す意欲的な書写書道活動」についての研究を進めてきた[1]。

単発開催ながら今年度も研究を続けることが認められた矢先に東日本大震災が発生し、家族や地域での「絆」の重要性を実感することとなった。そこで、「想いを伝える書き文字」というテーマを設定しての展開を考えることにした。

2.2.　南部生涯学習センターからの要望

これまでの南部生涯学習センターの講座は、静岡大学の専任教員や非常勤講師が依頼を受けて担当し、その際に書文化の学生が支援に当たるという体制が続いており、それと同様の流れで本学赴任早々に講座開催についての依頼を受けていた。

しかし今年度は、授業の一環として学生の主体性を重んじながら計画段階から責任を持って取り組ませた

いと申し出たところ快諾いただき、6月より本格的に話し合いを開始した。

静岡市視聴覚センター(マビック)との協同事業「主体性をもって書き表す意欲的な書写書道活動に関する研究／共催：静岡市、静岡県大学書道学会」に重ねて実施することに決め、テーマや内容を以下のように設定した。

『想いを伝える書き文字』～年賀状作成を通して～
【ねらい】
① 年賀状作成を通じて手書きの意義を体感する。
② 誰もが気軽に楽しく書を学ぶことが出来る喜びを理解する。
③ 新年を迎えるにあたり、心あたたまる手書きの年賀状によって想いを伝える。
【内　容】
・手作り葉書に書くオリジナル年賀状の作成。
・研究成果をマビック展授賞式にて発表。
・会期中、静岡市南部生涯学習センター・マビックで作品展示、実践の様子をビデオ放映。

2.3. 授業「書道研究」との関連

「書道研究」の授業には、書文化専攻の三年生以外に、高等学校芸術科書道の免許取得の意思を持つ国語科や他専攻の学生が数名加わっている。しかし書文化の学生との実技面の能力差が非常に大きいため、一斉授業によって他専攻生の技能定着を図ることは極めて困難である。そこで、他専攻の学生に対しては個別指導を実施している。

一方書文化の三年生は、これまでに各書体の実技学習やその作品化を経験しており、本年度の前期には「書式演習」の授業を履修して生活に生かす実用書についても学習を終えている。学習経験が活かせるばかりでなく、四年次に予定されている教育実習に向けての準備段階的な意義も大きい。そこで、生涯書道を考えるというねらいのもとに「書道研究」の授業一環として本講座の企画立案を三年生に任せ、書文化専攻生全体を関わらせることにした。

殊に書の場合は、学校教育だけでなく社会教育という視点からのとらえも重要である[2]ことから、下級生にも地域の方々との交流や実践経験は願ってもないことである。実施が決定した後には、当然ながら、講座を任されるということの重責を自覚させ、準備段階から気を引き締めて取り組ませた。

3．講座内容について

3.1. 本講座のKPI(Key Performance Indicator)

KPIとは、企業や学校、自治体などの組織が一定の目標を達成するため、目標に向かってのプロセスが順調に進んでいるかどうかを点検する最も重要な指標である。本講座が静岡市との共催であることを自覚して講座開催のKPIを確かめておく。

一つの授業としては「『想いを伝えられる手書きの年賀状』を字形や配置・配列に気をつけて作成する」というねらいで実践されるが、ここでは、「楽しかった」「有難かった」「学習の成果が感じられた」などの感想が得られ、「今回の講座は役に立った」ということを最終的な目標（KGI=Key Goal Indicator）と考える。ただし２回のみの開催では一定期間ごとにチェックして進捗状況を管理するKPIを導きだすことは難しい。そこで長期的な取り組みの開始段階として本講座をとらえ、「手書きの意義を体感して楽しく書を学び、今後の生涯書道学習につながっていくような働きかけができたかどうか」ということをKPIに定める。

「書道研究」の授業評価としては、企画や実施の中心的存在であった３年生が何を学び取ったのか、また他学年がどのように関わり、何を感じ取ったのか、其々の学生自身の主体的な活動になっていたのかという観点を据えることとしたい。

3.2. 講座案内の提示

実施の日時について、最初は大学の授業の状況を考えると平日開催は困難であろうとの判断から土日の開催を考えていた。内容についても、「想いを伝える」のであれば「手紙を書く」活動であると考えて提案していた。しかし南部生涯学習センター側から以下のような指摘があった。

まず日時に関して、毎週開かれる講座と今回のような特別開催の講座の場合とでは応募者の層に相違が生じること、土日や祝日には家庭での用が最優先されるため参加者の確保が難しいことの二点が問題視された。次に内容についても、漠然とした「手紙」というよりも、最も開催希望の多い「年賀状」の作成にしてはど

うかというアドバイスを受けた。実際、定期開催の講座での「年賀状講座」の予定が、年度当初から次々に決定している状況であり、それらの講座に申込みながら抽選にもれて受講できなくなった人が多いことへの配慮にもなり得るとのことであった。その他、開催に向けての詳細な部分についても幾度となく相談を繰り返し、最終的には『和の心　筆で書く年賀状』という講座名に決定していった。

センターでは、10 月 1 日付の「広報誌・静岡気分」に本講座の第一次案内を掲載、館内にも掲示して参加者を募集したところ、20 名の定員に対して 50 名弱の応募があった。そのため、急遽教室内の机の配置を工夫して 30 名を受け入れるよう変更した。キャンセルが出る度に繰り上げの措置もしてくれていた。

当日に授業がある1年生は大学内でやれる作業に限定していたが、定員を増やした段階で予定を変更せざるを得なくなった。今年度は共通科目について「欠席扱いとしない依頼」のプロセスが決定付けられたので、その手続きに苦労もあった。また出来るだけ休ませないよう配慮したにも関わらず、部活動でも同様の措置が取られており、結果的に重ねて休む学生が出現したことは残念であった。この度のような授業の一環の、しかも地域との連携を図る事業の場合と部活動の場合とに「欠席扱いとしない」ことの比重差を設ける等、学生の参加を推進するような配慮を望んでいる。

3.3.　受講者について

今回の受講者は、年齢層としては30代から80代までと幅広いが、平日の金曜日ということもあって 60 代が最も多かった。受講の目的も明確で「今年の年賀状を格好よく書きたい」という気持ちからの参加が多い。

受講者に対する質問「意欲的に学びたいのは年賀状の表面（宛名）、裏面（賀詞など）、どちらも同じくらい」の結果によると、63%が「裏面」、「どちらも同じ」が21%、「表面」は 16%となっている。また、書道経験を聞いた質問項目では「学校で習った程度」が 71%、「趣味程度」が 31%であり、通塾経験者や資格取得者はいなかった。

ところで、民営の書道塾や自治体が開講している定期的な書道講座に通うなどの方法で継続して学習を進めている、いわゆる生涯学習者の学習動機については、必要性に迫られて始める「A／必要性」タイプと興味・関心から始める「B／好奇心」タイプとに、大きく分けて考えられるといわれている[3]。

A）必要性による学習―書写技能の習得
　　実用型（仕事・免許）
　　貢献型（免許・資格）
B）好奇心による学習―書道への興味
　　学習型（書表現）

生涯学習における書道学習のタイプ

これに照合させてみると、本講座への参加動機は「格好良く」ということであるから、まずは整えて書きたいというAの「書写技能の習得」という意味合いを持ち、生活に生かす「実用型（仕事・生活）」であるととらえられる。しかし裏面に関しては B の「書道への興味」の意味をも有しており、なおかつパソコンで作成したり業者に印刷を依頼したりできる今日、手書きに拘っている点では B の要素が強いといえよう。このように、継続的学習者とは学習動機が微妙に異なっている。

おそらく、2回ばかりの受講では書写能力の急激な向上は期待できないと承知の上ではあろうが、少しでも「うまく」という意識で受講しているものと思われる。

さらに、葉書という小さい限られた空間の中にどうやって「想い」を閉じ込めるか。一斉に進める部分と個々の活動部分とのメリハリを確かめさせ、「想いを伝える書き文字」という研究テーマも意識して支援にあたらせることとする。

3.4.　用具・用材と机の配置

講座では小筆と墨液、筆ペンを用意し、宛名書きも裏の賀詞等の部分でも各自が書きやすい用具を使用することにした。裏面の制作に用いる絵の具は各グループのテーブルに1組ずつ準備してもらった。

松本の調査によると、中学1年生では65%が筆ペンは「毛筆」だという認識を持っており、66%が小筆より筆ペンの方が書きやすいととらえている[4]。しかし、受講者のほとんどが小筆の使用を希望していた。年齢層によって用具に対する意識に差異が生じている。

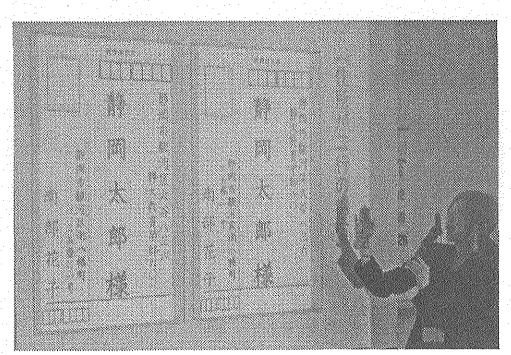
また机は教室の前面にあるプロジェクターを活用する関係上、首を横向きにするとスクリーンが見えるよう配慮し、長机を二つ合わせて4名が向かい合わせに着席できる形に配置した。そこに支援の学生を1名ずつ配し、受講者個々に対応できるようにした。

3.5. 講座の流れ

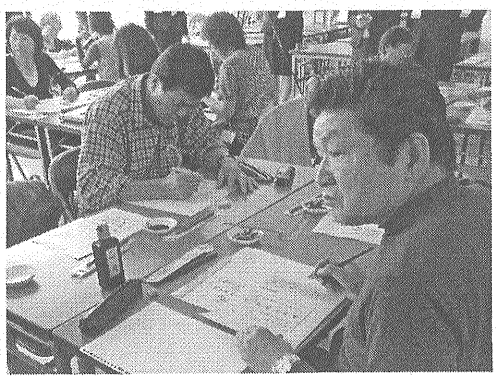
（1）『年賀状表書き』／1講座目　展開案

・宛名の書き方を知り書けるようになる。
・想いをこめた字の書き方を知る。（作成／3年生）

学　習	活　動	補　足
◦挨拶〔5分〕	◦先生の話（導入）　→ 進行役の学生挨拶	
◦試し書き　〔5分〕	◦プリント①に、自分の力で書く 黒板に宛名宛先を提示、差出人は自分	筆ペン or 筆　楷書 or 行書 下書きなし
◦書き方説明〔20分〕	◦見本プリント配布 1. 宛名（配置，字間，大きさ，〝様〟）宛先（配置，大きさ）宛名との位置,大小関係 2. 差出人のところも 3. 住所2行の場合 4. 名前3字（2字1字，1字2字）　5字（3字2字，2字3字） 5. 漢字・ひらがな・カタカナ大小関係	メモは見本のプリントに （時間があれば行う）
◦「静岡」の字形		
◦確認書き　〔10分〕	◦筆文字の字形説明 関連付け大小関係も ※汚れ防止のため、左から順に書くよう指示	下書きで字間や大きさを決める為に○を書いても良い
◦ハガキに書く練習　〔30分〕	◦プリント②に、①と同じ宛名で書く ・鉛筆で中央線 ・見本プリントと比較、出来たかを確認	親族や友人など、想いを伝えたい人に（裏面もその人のことを思って書ければ、なお良い）
◦ハガキに書く〔25分〕	◦送る相手を決める ◦自体のパターンをみせる（参考に） ◦偽ハガキに書く とりあえず一つにしぼって作る	下書きは十分に乾かしてから消す
◦2日目の説明		
◦アンケート〔10分〕	いったん前を向いてもらい、本番に書ける人から書く ・完成！一枚完成した後は何枚でも ハガキはこちらで預かる（次回使用）	書体を変える、宛名を変えるなど
◦挨拶〔5分〕		



プロジェクターを使った説明の様子



熱心にメモを取る受講者

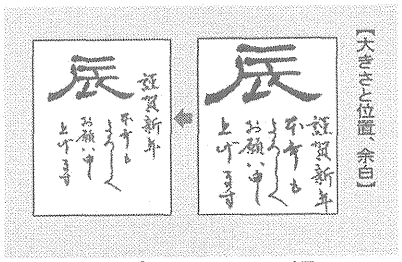
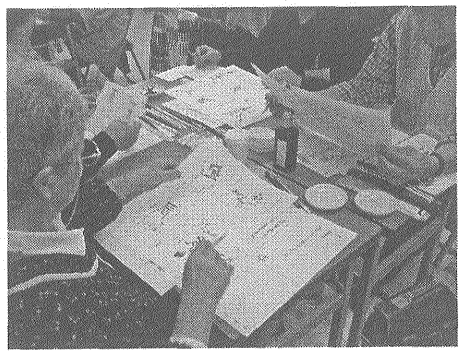
学生による支援の様子

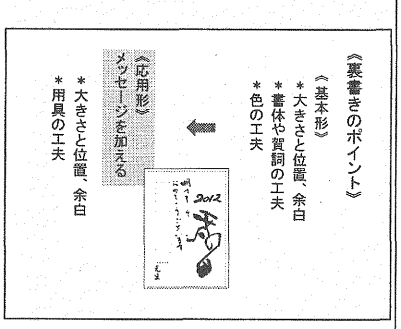
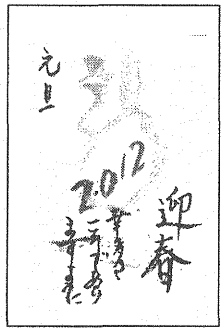
全体的には問題なく終えることができた。しかし計画を立てていたにも関わらず進行役の学生が当日の時間配分を変えたため、他の学生が流れを把握できずに主体的に動けなかった。学生が各々積極的に動けないと講座全体の雰囲気が停滞する。そこで、大学に戻ってこの点を大いに反省させ、次回に向けて念入りに確認させた。

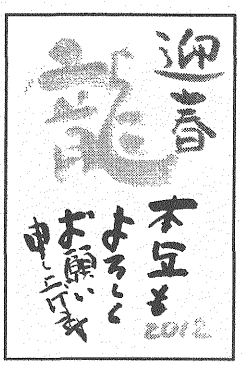
（２）『年賀状裏書き』　／２講座目　展開案

◦ねらい：干支、賀詞などの工夫を理解し、想いを伝える年賀状を書く。

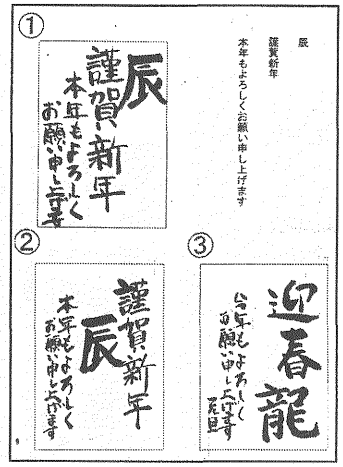
◦グループ内支援者　8名（8グループ各1名）　◦カメラマン3名　◦受付2名　（作成／３年生）

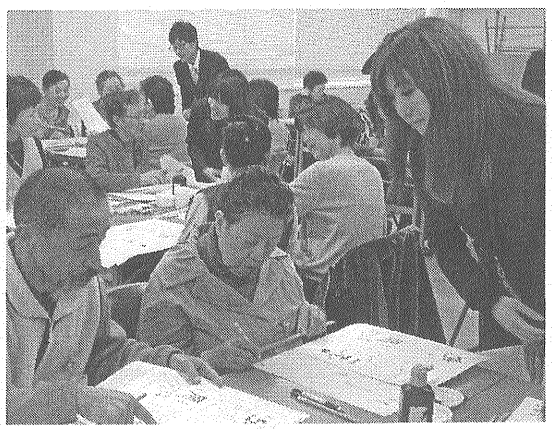
学　習	活　動	各グループ留意点／＊学生の動き
◦挨拶　10時（5分） ◦試し書き　10 時 5 分〔10分〕	先生挨拶　進行役の学生挨拶	＊プリント①～③が書いてあるプリントを机上に置いておく ＊（1）Ａ４の大きさの違う作例のプリントを配布する 下書きなしで書く（ここではなるべく口を出さない、自由にしてもらう）
① ◦説明（Ｐpoint Ｉ） 10時15分〔5分〕	◦プリント①に指定した文字を使い、年賀状各々に書いてもらう（普段の感じで）	 活動の説明をする 進行役の学生
◦２回目のプリント書き 10時20分（10分）	◦説明 大きさ、位置について説明をする	
	説明をふまえ余白、位置、大きさに気をつけながらプリント②に同様の文字を書く	体裁よく書けていた人には、同じ文字で少し配置を変えたものを書くように働きかける （ここでは干支、賀詞は同じで配置、余白で見え方の違いを実感してもらう）
② 書体の特徴説明及び３回目のプリント書き 10時30分(20分)	 パワーポイントでの提示 干支の書体の特徴と種類の説明 →干支の書体、賀詞を変えてプリント右下③に書く	＊大きさと余白、位置の確認をする（大きさ、位置を○で示してもらう） ＊（2）書体の種類表、賀詞のプリントの配布（書体説明の前） ４作例のプリントも配布 書体等の要望を聞き、完成図をともに考える  ワークシートを使った学習

説明（Ppoint 使用）	Ppoint I で干支や賀詞などに色をつける提案をする	 学生による支援の様子
色の構想及びハガキ書き 10 時 55 分（10 分）	干支、賀詞の位置を大きく変えたものを見せ →構想のさらなる提案をする  《裏書きのポイント》 《基本形》 ＊大きさと位置、余白 ＊書体や賀詞の工夫 ＊色の工夫 《応用形》 メッセージを加える ＊大きさと位置、余白 ＊用具の工夫 裏書きのポイント提示	＊ＰｐｏｉｎｔⅡで相手を想定したメッセージを書くように指示→各自確認
はがき書き 11 時 5 分（40 分）		ここで完成図ができる。 しっかりと今までのことがふまえられているか確認 ＊配色などの相談に応じる。用具用材のアドバイスをする
片付け及びアンケート 11 時 45 分（10 分）	前回と同じように片づけをしてもらい、終わった人からアンケートの記入をしてもらう	 ＊アンケート回収、 片づけ手伝い ＊会場片づけ
挨拶　11 時 55 分（5 分）	杉崎先生のあいさつで締めくくる	
終了 12 時		



ワークシートと
完成作品




学生による支援の様子

学生がアドバイス 毛筆で年賀状作り

駿河区で書き方講座

静岡市南部生涯学習センターは11日、静岡大教育学部書道専攻の学生の協力で、毛筆を使った年賀状の書き方を学ぶ講座を静岡市駿河区の同センターで開いた。

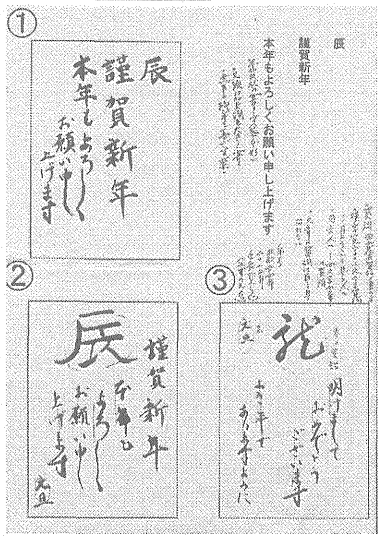
市内の30～80代の約30人が受講した。来年のえと「辰」「龍」の文字を、学生のアドバイスを受け、手本を見ながら楷書体や草書体などで書いた。「謹賀新年」や「迎春」などの賀詞も書き入れ、1人5枚ほど年賀状を仕上げた。

受講した不動産業小田切清さん(72)＝清水区有東坂＝は「文字ははがきいっぱいに書いていたが、余白部分があるほうがきれいに見えることを知った」と、自作の年賀状に満足した表情を浮かべた。

学生（右）のアドバイスを受けて毛筆で年賀状を書く参加者＝静岡市駿河区の南部生涯学習センター

静岡新聞（平成23年11月12日）

ワークシートと完成作品



4．実践を終えて

4.1. アンケートの結果をふまえて

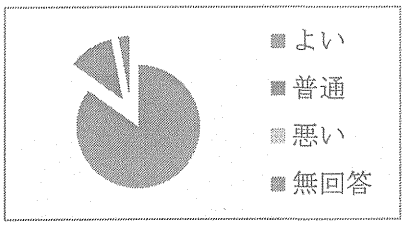
調査項目の回答結果をもとに、本実践の評価をしていきたい。

◎講師の指導の仕方は分かりやすかったか。

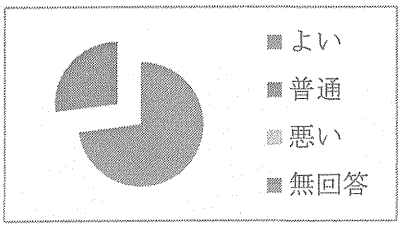
１日目／よい（77%）、普通（23%）、悪い（0%）

２日目／よい（85%）、普通（15%）、悪い（0%）

◎スライドを使用した説明は分かりやすかったか。

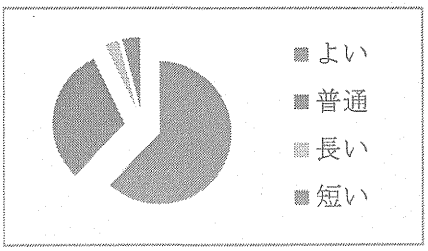


１日目

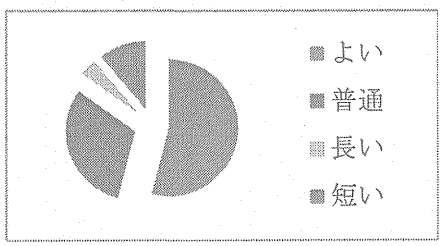


２日目

◎作業時間は十分に確保されていたか。



１日目



２日目

◎資料について（見本など）

１日目／よい（74%）、普通（19%）、悪い（0%）

２日目／よい（85%）、普通（12%）、悪い（0%）

無回答…１日目（7%）、２日目（3%）

4.2.　ＫＧＩとＫＰＩのチェック
… 最終目標と目標に向かうプロセス点検の指標

(1)受講者／今回の講座は役に立ったか

「今回の講座は役に立ったか」というＫＧＩについて、受講者全員が「役に立った」と回答している。また、「指導の仕方」「スライド」「資料」に関して、「悪い」の回答がなかったことから、プラスの評価といえる。

ただ１日目は進行そのものに変更があって他の学生が把握できていなかったため、指導の仕方についての「よい」の回答がやや少ない（前頁グラフ参照）。一方、２日目は進行役の学生の反省（右参照）にあるように、「賀詞や干支を使った表現の工夫」と「メッセージを書いて想いを伝える」という二段階の展開が時間的に難しかった。

さらに、ＫＰＩに設定した「今後につながる働きかけになったか」という観点でみていくと、「よく分かった」「明らかによくなった」「楽しかった」という前向きな回答が多く、「今後も講座に参加したい」「これからはパソコンにさよならして手書きにする」というように今後につながる発展的な意識が確認され、成果が見られる。

(2)専攻生／やり甲斐を感じることができたか

進行役の学生とそれ以外の３年生、支援を担当した学生全員が支援の体験を有意にとらえており、専攻生にとってもＫＧＩは達成できたと考えられる。受講者からの感謝の言葉と確かな向上の確認によって学生は喜びを感じていたが、それに満足して留まることなく、さらに「積極的に支援（指導）できるよう、自らの知識・理解と技能を向上させたい」という前向きな姿勢が見られる。これは教員養成という本学の教育理念にも合致している重要な成果である。

また「手書きで書くことにより無表情な活字では絶対表すことのできない温かみやその人独特の心情なり個性を表すことが出来たのではないかと思う。私自身改めて手書き文字の重要性を確認することが出来た。」というように、学生自身が「書き文字」の魅力を再確認した点も評価できる。

さらに「自分がまず年賀状の正しい書き方を学ぶことから始め、日本の伝統・しきたりに触れることの重要性を年配の方々との交流を通じて改めて感じた。」「地域の方々と関わり、手書きで書いた葉書のあたたかさ、良さを伝えられた、いい機会だった。」との感想にもある通り、生涯学習を自身の問題として受け止めていることも、地域との関わりの大きな意義であろう。

裏書き進行役の学生の感想・反省／

裏書きを書く活動では干支、賀詞の言葉を墨、絵の具を用い視覚的変化とともに変化に応じた相手への言葉書きの創意工夫をねらいとした。最初は余白が多くて白が強く文字から受ける印象のさびしかったものが、活動の最後にはハガキの紙面を効果的に使い余白を生かしていたので、ねらっていたことは理解してもらえたと感じる。ただ創意工夫を凝らしたものも少しあったが、半数が配った資料の様に書かれていたので反省点の１つである。

他に次の５点も反省すべき点である。

- 干支、賀詞の表現効果と相手へのメッセージの２つの要素を、どちらに重きを置くかを考慮せず盛り込んでしまい、中途半端になってしまった点。
- 時間とねらいと照らし合わせてみると、時間内で行える展開案ではなかったように思う点。
- 展開案の考察不足。自分自身がしっかりと理解できていなかったために説明が重複した点。
- 自らと一般の方との書道の知識の差を考慮しなかった点。
- 明確なねらいとなっていない。どうすれば視覚的変化がもたらされるかを盛り込むべきであった点。（以下略）

4.3　反省点

（１）事前準備の不徹底

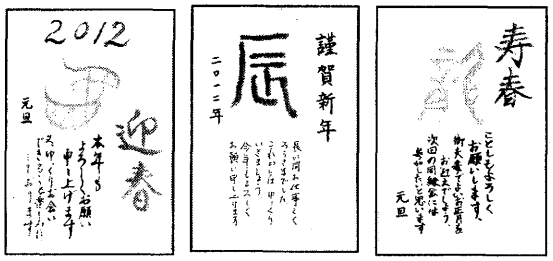
① **展開案の検討について**…ねらいは明確になっていたが、提示の仕方に工夫が足りなかった。

② **スライドおよび配布資料について**…表書きでは、スライドを細かく作りすぎて注意が散漫になった。裏書きでは、参考資料のつもりで配布したが、結局はそれを使って書く人が多かったので、創意工夫の時間も少なくなった。少し内容を絞り精選した方がよかった。

③ **受講者個人への配布資料について**…受講者一人一人の宛名を書くと喜ばれるからと事前に準備したが、技能の不安定な学生がいて時間を要した。「手本」のない個人名や住所も整えて書けるよう専攻生への指導の徹底を痛感した。

④ **時間配分について**…表書きの際は、まず変更が問題であったが、名前の字数別の配置に時間をかけ過ぎたことも、個人の活動にバラつきができた原因であろう。また裏書きでは、年賀状におけるタブー、干支を使った書体の説明、色々な賀詞の紹介など、講義部分が多かったため、創意工夫の時間が不足した。研究のねらいである「メッセージを書く」展開を大事にした精選が必要であった。

⑤ **模擬授業形式について**…他の行事も３年生が主体となっており専攻生全体で集まれる時間の確保が困難だったが、しっかりした模擬授業が出来ずに本番を迎えてしまったため、実技に要する時間やプロジェクターの効用を最大限に引き出せるようなメモを取る時間の確保等への対応を予測できなかったことを反省している。



メッセージ入りの年賀状

（2） 進行上の問題点

① **支援者への伝達について**…これも、模擬授業を念入りにやって臨めば解決できた。

② **活動の流れについて**…「最初に流れを説明してほしかった」という声があった。起承転結で盛り上がりを期待する場合もあるが、時間配分も含め流れを示すと安心して活動に取り組めた。

③ **支援者の数について**…受講者は「沢山の学生さんが親切に指導してくれて嬉しかった」「学生さんだから聞きやすかった」と考えてくれていたが、30 代の方２名は「人が多くて落ち着かなかった」と記していた。担当者によると、年配の方はこの講座を若い人との交流としても楽しみにしてくれるが、年齢が若いと定期講座のような「じっくり取り組む」形を期待しているようである。しかしこの講座は、あくまでもイベントとしての実施であるから、今後も同様のスタイルでの実施が要請されている。

５．考察

5.1. ＰＤＣＡサイクルへの照合

事業活動を充実させ、円滑に実行するためには入念な計画が必要である。ＰＤＣＡサイクル（=plan-do-check-act cycle）の手法[5]の具体的な指標で大事なのがＫＰＩであり、さらに分かりやすくしてプランニングの段階から多面的な視点で設定していくのがバランスト・スコアカードであると考えている。本講座のように学生を絡めた地域連携としての「書道」について考える場合にも、事業活動の管理手法であるＰＤＣＡサイクルの活用が有効であると考える。

ただ、今回は時間的な問題から、ＰＤＣＡサイクルの手法を十分に活用するまでには至らなかった。しかし、最初にＫＧＩを「受講者にとって…講座が役にたった」「書文化専攻生にとって…やり甲斐を感じた」ということにし、両者共に「今後につながる働きかけになったか」をＫＰＩに設定したことによって実践後のチェックが容易になった。ここでは、ＰＤＣＡサイクルに照合させて先述の実践結果を検証してみる。

まず「１．Plan（計画）＝従来の実績や将来の予測をもとにして計画を作成する」の段階での甘さが浮かび上がった。次に「２．Do（実施・実行）＝計画に沿って実行する」については、多少の変更はあったものの計画通りの展開が出来ていた。最も重要な「３．Check（点検・評価）＝実施が計画に沿っているかを確認する」の段階が、先のＫＧＩ・ＫＰＩによるチェックであり、「４．Act（処置・改善）＝実施が計画に沿っていない部分を調べて処置をする」へと継続することになる。

今回の講座は二日間として実施しているので、このサイクルの効用である次のＡへの結びつきが必然的に弱くなる。しかもこの講座は、受講者と専攻生だけでなく生涯学習センターの意向も交錯しているため実に複雑である。したがって幸いにも開講の約束されている次年度に向けて、ＰＤＣＡサイクルを生かさなければならないと考えている。具体的には、評価項目を細かく観点領域によって分類するバランスト・スコアカードを導入し、今回設定した３段階から５段階の評価に変更することを検討している。

5.2. 学生を絡めた地域連携としての「書道」

バランスト・スコアカードの４つの視点を、学生を絡めた地域連携としての「書道」事業に当てはめて考えてみると次のようになるだろう。

＊『財務の視点』は市としての指標の設定である。受講者の希望に応え、講座開催の実績を問われる。

＊『顧客の視点』とは、顧客、つまり受講者に対して、学生がどのように行動すべきか、講座への取り組みや立ち位置であると考える。

＊『業務プロセスの視点』については、今回のチェックをさらに進め、受講者、専攻生、市のいずれの視点についても検証できる方法が求められる。

＊『学習と成長の視点』は、それぞれの立場で、どのように変化し改善して向上を図るかの指標であり、今後につながるサイクルとして重要である。

筆者はこれまでも「リフレクションカード」を使用した授業を試みた[6]が、児童生徒を対象にした場合、長期的に関われて実態の把握が容易であるがゆえに、一度の実践を次回につなげる手だてが不明瞭になった。その点で次年度以降へと生かすサイクルの効用が期待できる。年代による志向の差が授業という形式への不整合をもたらす点にも注意が必要である。

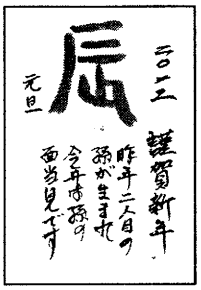
内容に関しても、今回は「想いを伝える書き文字」という公募展と関連付けた研究ということもあって「メッセージ」に拘ったため、配布資料を頼って賀詞や干支だけを書いた年賀状は専攻生に物足りない印象を与えた。しかし受講者は、書き文字自体にメッセージ性を感じている。また短い言葉に「想い」を込めたという人もいた。出来映えを問題にするのではなく、筆を使って一枚一枚書こうとする主体的な活動そのものが貴重なのではないだろうか。中には、一枚だけを丁寧に仕上げて印刷し、ペンでメッセージを書き添えるという人もいた。各々が自分に合った方法で「想いを伝える」年賀状を作成できるこの活動を、今後も充実させたいと考えている。

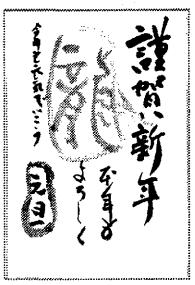
6．おわりに

講座の後半、それまで寡黙で消極的だったある男性が「遠方で働いている息子とは、長く話していない。でも一緒にいる娘が最近素直になってきた。」と語り始めた。目の前の学生に我が子の姿を重ね、控えめながら交流を楽しんでくれていたようである。また「静大生のイメージが今までよりもよくなった。」とのメッセージも寄せられた。

日頃自分の表現活動として「書」をとらえている専攻生であるが、今回、参加してくれた地域の方々から実に多くのことを学ばせていただいた。

「地元にある大学への期待は大きい」というセンターの担当者の言葉を嬉しく感じるとともに、重責を再確認している。





脚注

[1]『文字文化と書写書道教育』平形精一編、萱原書房　2011　第Ⅱ部書写書道教育（含 生涯学習・地域連携事業等）杉﨑哲子「書き文字で伝える静岡の魅力 - その１ー」見城正訓「書き文字で伝える静岡の魅力 - その２」p. 377～399

[2] 滝口雅弘、葛西孝章「生涯学習と書道学習の在り方 - 成人学習者の意識調査を通して - 」『書写書道教育研究　第 18 号』2004 p. 31～40

[3] 高橋恵子・波多野誼余夫著『人はいかに学ぶか 日常的認知の世界』中央公論新社 1989 p. 21～64

[4]松本貴子「生活に密着した筆記用具に関する一考察 - 筆ペンの効用について - 」『書写書道教育研究　第 17 号』2003 p. 49～58

[5]ロバート・S・キャプラン、　デビット・P・ノートン著、櫻井通晴訳「キャプランとノートンの戦略バランスト・スコアカード」東洋経済新報社　2001

[6] 杉﨑哲子「小学校国語科書写における自己の課題認識から解決への手だてに関する考察」『日本教育大学協会全国書道教育部門研究紀要』第９集　2004　p. 2～11